

第三百五十四回 青葉会

平成二十七年九月二十四日(木) 午後六時〜九時 丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉 ☆ 川合万里子 先生

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 川口孤舟 小西弘子 朱牟田恵洲

豊田ゆたか 山内天牛

柿崎忠彦 後藤保明 小早健介 土谷堂哉 中野一灯 中山芳博 福島正明 古田昇

星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 渡邊盛雄

安部眞希子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 星田啓子

村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

七点 ☆◎ 口論を打切りて聞く蟬時雨

(☆:「て」をつなぎにすると句が緩むので切字「や」を用い、「口論を打切り聴くや蟬時雨」)

◎ 遠山の低くけぶりて稲雀

◎ この夏は前略もなく去りゆきぬ

☆ 虫の音に心遊ばせ爪を切る

ほほづきを鳴らし思ひ出ひとつ消す

紺碧の空引き連れて鷹渡る

(啓:琳派の絵が連想される美しい作品)

☆ 流れ星伝言一つ残さず

(☆:「伝言を流れ星から聞きたかり」)

四点 銀漢の尾に漁火のひとつたむる

☆ 擁壁に一線黒き秋出水

(☆:中七↓「黒き一線」)

☆ 饒舌に氣付き盃乾す新酒かな

(☆:「饒舌に氣付き新酒の盃を乾し」)

☆ いちじく挽ぐ妹負い挽ぎし日のありき

(☆:「無花果や妹を負ひ挽ぎし日も」。描写がくどくなるので余韻は読み手に委ねること)

☆◎ 潮湿(じめ)る槌音海の家たたむ

(☆:「海の家たたむ槌音潮湿り」)

☆ 白馬より明るる湿原濃竜胆

赤き月隣家の屋根を渡りけり

◎ 夏寒き異国の丘に羊群れ

地唄舞「玉菊灯籠」

吉原や新内流す燈籠会(き)

◎ 母子像の母の眼勁し秋薊

野分立つ瑞穂の国の米離れ

☆ 野分水溢れし里の柿たわわ

(☆:季重なり)

山薄(すさき)夕陽背負いて銀波燃ゆ

(☆:これも「て」つなぎを止(き)めて「夕陽負ひ深山薄の銀波燃ゆ」)

仁左衛門の「立場の太平洋」

悪役も声爽やかに凄味あり

「美在乱調」(無心会書道展)

読めずとも金文四文字(きんぶんよもじ) 秋うらら

白鷺や田毎に一羽占めて立つ

☆ 太鼓の音駅舎に聞こえ村祭

(☆:中七↓「駅まで届き」)

啓子 (万・ゆ・く)

紀久男 (敏・正)

全 (隆・正)

全 (眞・猛)

全 (眞・万)

そらお (猛・万・孤・ゆ・隆・啓・く)

弘子 (そ・紀・孤・恭・ゆ・青・三)

猛 (紀・孤・千・龍・啓・天)

芳博 (そ・猛・万・ゆ・青・三)

孤舟 (猛・恵・龍・敏・天)

全 (紀・恭・恵・正・啓)

正明 (猛・恭・万・龍・隆)

孤舟 (紀・猛・弘・く)

弘子 (紀・万・青・三)

健介 (そ・万・敏・く)

ゆたか (眞・そ・万・弘)

一灯 (孤・万・龍・允)

全 (弘・恵・允・く)

そらお (千・龍・啓)

全 (孤・恵・允)

紀久男 (敏・允・正)

弘子 (紀・允・青)

健介 (眞・孤・隆)

ゆたか (恭・万・弘)

ふるさとの砂浜消えし秋の風  
風の紋川面の紅葉散らし行き  
鬼やんま駅に迷ふて羽打てる  
(☆↓「鬼やんま小駅に迷ひ羽搏ける」)

人の非力また思ひ知る大出水  
秋暑く愈々募る忘れ癖  
(☆…「暑く」↓「暑し」)

☆◎秋澄むやブラスきらきら入場す  
(☆…上五↓「秋高し」)

銀漢やふつと湧く民の声  
紫蘇の実や妻菜園に腰かがめ  
ひよつとこの面を頭に切西瓜

ストラディブアリ秋の夜長を深くする  
肩書きのなき人生を爽やかに  
床の間に秋忍び入る茶席かな

☆ (☆…中七↓「秋の気配の」)

☆ 読みさしの書を枕にし昼寝かな  
長き夜や遊んでくれと犬せがむ  
(☆↓「夜長し遊んでくれと犬せがみ」)

☆ 少年の母郷は白し捨案山子  
軒簾ばたばた鳴らし秋の風  
(☆…季重なり)

盛雄 (恭・三)  
そらお (万)

オペラはねプリマと乾さん新走(あらばしり)

彼岸花墓参促すごとく咲き  
敬老日一千万余が傘寿超ゆ  
秋彼岸御下(おさがり)狙つておはぎ食ふ

秋の旅ローカル線の揺れ強し  
田は黄金リングは赤き津軽かな  
白露かな風はきのふの風ならず

梶の葉に芭蕉の一句認むる  
秋刀魚祭り煙のスクリーン影芝居  
人待ちの月待ちの碑や中仙道

転ばぬ先の杖確かむる防災日  
彼の人はプロメテウスか曼珠沙華  
サーファアの真黒き肌や秋寂し

◎

ぼろぼろの団扇を使いごろ寝かな  
梨剥くや廿世紀は過ぎ去りぬ  
シルバーパス十六回目のまた九月

ひとつまみ綿菓子くれし秋祭  
主(あるじ)なき棚田の畦に幽霊花

紀久男 (そ)  
猛 (千)  
全 (真)  
全 (千)  
恭延 (龍)  
忠彦 (紀)  
孤舟 (啓)  
全 (三)  
保明 (ゆ)  
弘子 (そ)  
昇 (孤)  
啓子 (三)  
全 (正)  
規雄 (天)  
亜也 (紀)  
天牛 (弘)  
全 (青)  
盛雄 (紀)

●次回青葉会

十月二十二日(木) 午後五時半から八時半

▲当季雑詠五句 投句二句

十一月二十六日(木) 午後五時半から八時半

丸紅 コンチエルト(談話室)

平成二十七年九月句会報

一 社友会ビヤパーティ(16階講堂) 途中で抜けて参加の天牛さんはじめ9名出席。投句はドイツ旅行中の一灯さんら13名。弘子さんが万里子先生の近況(萬緑の多摩句会にお元気で参加されておられる)を報告され、孤舟選者が代表の『爽樹』9月号を回覧し乍ら開始。

御覧のようにそらおさん、弘子さんが高得点でした。途中鶴岡さんが天牛さんに御挨拶に来られました。

二 関係者近詠

梅雨見舞校友会の名簿繰り

万里子

合羽など着せられ哀れ梅雨の犬

恵洲

コンドルの卵の孵る猛暑かな

全

「NHK俳句」9月号  
琉金と話して臉濡れにけり

西村和子選  
規雄

蟾蜍轢かれ鴉の急降下

全

「NHK俳句」10月号  
涼新たわけても匂ふ青畳

西村和子選  
允章

仰向けの落蟬に入む蟬時雨

全

知恵の輪を孫にせがまれ夏休み

全

自撰句よ木槿のやうな一日花

全

卯建立つ宿場の空や夏燕

全

秋暑し性悪説に立向かひ

全

金管のフォルテツシモや夏盛る

全

屋台へと留学生連れ星月夜

全

戦知るも知らぬも禱る敗戦忌

全

空腹をバナナで宥め原爆展

眞希子

我名呼ぶは空耳なりし昼寝覚め

全

自衛艦にこどもたち満ち海の日とは

全

「大鉄会」8月  
いくらかは戸惑ひもあり敬老日

全

花胡桃幼なじみは木曾言葉

全

隣人とは和するに如かず澄める秋

全

朝涼やリユツクサツクを揺り上ぐる

弘子

銀漢や宇宙のリズム狂ひなし

全

白犬の何叱らるる夏の土手

全

「きさらぎ句会」9月  
早春のひかりに向かふ駿馬かな

全

迎火のちりちり赤き糸となる

全

孤舟

不死男の忌みな頭を上げよ声あげよ

青史

桃のやうな女人(ひと)と言はれし頃ありて紀久男

全

ふるさとのこれがふるさと草いきれ

全

三毛猫は駆込寺へ朧月

全

山清水掬す総身水になる

全

「角川俳句年鑑にも掲載」  
シナトラのドーナツ盤や冬銀河

全

南三陸町

「ここまで波」の標かなしも夏薊

全

淡墨に暮るるモルダウ鳥渡る

全

散歩する気のとんと萎え猛暑なか

恭延

外側の花びらに傷冬薔薇

全

底紅や切なき恋の昼ドラマ

忠彦

「俳誌要覧」2015年

全

玉三郎・中車の「牡丹燈籠」

紀久男

脚高の八雲の机梅雨湿り

全

殺し場へ畳みかくるや汗忘る

全

「俳誌要覧」2015年

全

「萬緑」 十月号

堂哉

「俳誌要覧」2015年

全

貼紙のふと目に留まる新豆腐

全

脚高の八雲の机梅雨湿り

全

幾千里訪ひ来し蝶や藤袴

全

「俳誌要覧」2015年

全

仲見世は異人の埧塙秋暑し

昇

脚高の八雲の机梅雨湿り

熊谷國男

くつきりと火の見櫓や望の月

允章

煌めける湖を眼下に花馬酔木

全

地酒酌んで宿場の秋を惜しみけり

全

「俳誌要覧」2015年

全

(大内宿)

佐藤吉之輔「歌舞伎俳句歳時記帳」

全

「俳誌要覧」2015年

全

(文芸春秋9月30日¥1,852)

小生の畏友(角川書店・元専務)の久々の上梓です。秋の句より小生好みを抄出してみました。

・ 一力の秋めく宵の千鳥足(七段目・一力茶屋の場)

・ 蹴落して覗く日暮れの秋の水(四谷怪談)

・ 胸に詫び放つ言葉の冷ややかに(籠釣瓶)

・ 数珠当てる秋の夜裂くる口の端(土蜘蛛)

・ 秋時雨着せる別れの旅合羽(伊賀越)

・ 桶かかげ秋日に据える酒乱の眼(魚屋宗五郎)

以上

平成二十七年十月十一日

紀久男記